＊ ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。
ICU 公式の試験問題用紙ではありません。
(This is NOT the official Exam.)

No.000001

受験番号					

学習能力考査

人　文　科　学

資料及び問題
指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 頑張っていきましょう。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があったらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書きいれること

Edited by www.bucho-net.com

I

ホメーロスの作とされる古代ギリシアの英雄叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』は、ギリシアの文化全般に多大な影響を及ぼした。特に英雄叙事詩のジャンルにおいては、両叙事詩は手本とされ、ギリシアの詩人のみではなく、ローマの詩人によっても模倣された。ローマにおけるその最も顕著な例はウェルギリウスの『アエネーイス』であろう。さらに、ルネッサンス以後にも、ギリシア・ローマの英雄叙事詩の伝統は引き継がれた。この伝統に属する詩人たちは、先行する作品の形式や表現を時には模倣し、時にはそれに変更を加えつつ、それぞれに創意工夫を凝らした作品を創造した。このようにして西洋における英雄叙事詩の系譜が連綿と続いたのである。この系譜には、20世紀前半に活躍したアイルランド出身の作家ジェイムズ・ジョイスが著わした『ユリシーズ（*Ulysses*）』（1922年）も属しているとみなすことができるであろう。ちなみにUlyssesとは『オデュッセイア』の主人公の名前であるオデュッセウス（Odysseus）のラテン語形に由来する英語形である。伝統の踏襲とその革新に注目してこの伝統をたどることにより、個々の作品のみに注目する場合には気づきにくい特徴を把握することができるであろう。本論考においては、代表的な作品である『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』、さらに英国の17世紀のジョン・ミルトン作『失楽園』（*Paradise Lost*）をとりあげて、それぞれの作品に見いだされる創意工夫を具体的に検討することとしたい。上述の四作品を取り上げる際に、特に冒頭に置かれた序歌に注目する。序歌には作品全体のテーマが凝縮された形で提示されているからである。

冒頭に作品全体のテーマが簡潔に提示されることは、特に西洋の英雄叙事詩に限られない。例えば『平家物語』巻第一は次のように始まる。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。
娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。
おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。
たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

「祇園精舎の鐘の声」と「沙羅双樹の花の色」は、仏典中の説話への言及である。これらの説話は『往生要集』にも引用され流布していた。これらの説話と結びつけて、「諸行無常」と「盛者必衰」という「理」(1) が印象深く提示される。以上の引用に続けて、「諸行無常」と「盛者必衰」に当てはまる中国と日本の歴史上の人物が列挙され、最後に平清盛の名が挙げられる。『平家物語』を通して「諸行無常」と「盛者必衰」は、平清盛のみではなく他の平家の重立った者たちにも、また源氏方の木曾義仲にも当てはまる。従って、仏典中の説話に表れ、歴史上の多

くの人物たちにあてはまる「諸行無常」、「盛者必衰」が、この『平家物語』全体に通低するテーマとしてその冒頭に提示されているのである。

II

『イーリアス』の序歌においては、『平家物語』の冒頭よりもさらに限定された形で作品全体のテーマが提示される。そのテーマとは「怒り」（*μῆνις*, mēnis）である。

怒りを歌え、女神よ、ペーレウスの子アキレウスの、
呪わしき（怒りを）、それは数知れぬ苦難をアカイア人らに与え、
英雄らの多くの勇敢な魂をアイデース（冥王）のもとへ送り、
その死体は犬どもと鳥どもの餌とした、
そしてゼウスの計画は遂げられていった、
最初に二人が争って仲違いしたとき以来、
兵士らの王たるアトレウスの子と、神のごときアキレウスとが。

（『イーリアス』第１巻１－７行）

長大な叙事詩『イーリアス』の最初の語である「怒り」が作品全体のテーマを告げ、その怒りがアキレウスの呪わしき怒りであることが次の行にかけて示される。さらに、引用中の二行目の「それは」は原文では「怒り」を先行詞とする関係代名詞であり、これによって導かれる関係節において、この「怒り」がアカイア人ら（ギリシア軍）の多くの兵士たちが死んだ原因であったという説明が続く。そしてこの「怒り」とはアキレウスとアトレウスの子（アガメムノーン）の争いから発したものであることが序歌の最後に述べられている。

『イーリアス』はギリシア神話のトロイア伝説を題材とする英雄叙事詩である。アガメムノーンを総大将とするギリシア軍がトロイアに遠征したトロイア戦争は十年にも及ぶ長期戦となったが、『イーリアス』はこの戦争の最後に近い短期間のみを叙述する。しかも、序歌に表れているように、アキレウスの怒りが叙事詩全体を束ねるテーマとなるよう作品全体が構成されている。すなわち、武勇の点でギリシア軍随一の英雄アキレウスは、アガメムノーンによって侮辱されたため、怒って戦闘から退く。アキレウスは自分の母親である女神テティスを通じてゼウスに対し、自分が戦闘から退いている間にギリシア軍が劣勢になるよう依頼する。ゼウスはこの依頼を聞き入れる。アキレウスが戦闘から退いている間にギリシア軍は劣勢となり、多大な被害を被るが、アキレウスはアガメムノーンに対する怒りのゆえに自らは戦闘に復帰せず、自分の親友パトロクロスを戦場に遣わす。そのパトロクロスはギリシア軍の窮地を救った後、トロイア軍の英雄ヘクトールに殺されてしまう。アキレウスは親友の復讐を遂げるために戦闘に復帰する。ここでアキレウスの怒りの対象はアガメムノーンからヘクトールに代わる。アキレ

ウスはヘクトールを討ち取った後でも、怒りを鎮めることはできず、ヘクトールの死体を戦車で引きずり回す。『イーリアス』の最後は、遂にアキレウスの怒りが鎮められ、ヘクトールの死体がその父親であるトロイア王プリアモスに返された後、ヘクトールの葬儀が行われる場面となっている。『イーリアス』はアキレウスの怒りの発端から始まり、怒りの終焉をもって終わるということができる。

現存のギリシア文学作品の中では『イーリアス』は最古の作品であるが、トロイア伝説を題材とする英雄叙事詩が『イーリアス』以前に存在していたことは確実である。しかし、多く存在していたはずの英雄叙事詩人の中でホメーロスのみの名声が高まり、『イーリアス』が今日まで伝存する最古の作品となった。『イーリアス』が名声を博し伝存したのは、この作品が他と比較して何らかの格段にすぐれた特質を持っていたためであろう。この特質が何であったのか実証的に明らかにすることはできないが、その一端は「怒り」を序歌の最初に掲げ、それを作品全体にわたるテーマとした叙事詩となっていることにあるかもしれない。それまでの叙事詩がトロイア戦争中に起きた出来事を時間の経過に従って叙述する年代記風の作品であったとしたら、『イーリアス』が長大な叙事詩でありながら「怒り」をテーマとする顕著な統一性を持つことは、この作品が特にすぐれているとみなされた理由の一端であると考えることができるであろう。

Ⅲ

『オデュッセイア』は『イーリアス』と同様に紀元前8世紀の終わり頃に成立したと考えられる。古代ギリシアでは一般に、両作品ともホメーロスの作であると考えられていた。『イーリアス』と『オデュッセイア』の作者を別とみなす分離論者は、少数派であった。ロンギーノスの作とされてきた『崇高について』（A. D. 1世紀頃）では、『イーリアス』をホメーロスの壮年期の作品、『オデュッセイア』を老年期の作品とし、つぎのように述べている。

> それゆえ『オデュッセイア』においては、ホメーロスを沈み行く太陽になぞらえることができるであろう。そこには激しさはないが偉大さはとどまっている。
>
> （『崇高について』第9章）

19世紀のドイツ語圏を中心とした研究者の間では、両叙事詩の著者に関して新たな見解（分析論）が提唱された。それは、原作者が作った部分に、後の劣った詩人が大幅に付け足したものが、今日まで伝存した『イーリアス』と『オデュッセイア』に含まれているというものである。この見解に従うと、『イーリアス』と『オデュッセイア』において、繰り返しや矛盾した部分を取り除くことにより、原作者によって作られた「真正な」部分を復元することができることとなる。このような研究がドイツ語圏を中心に盛んに行われていた間、英語圏を中心とする

研究者の間には、分析論の論拠を無視して、『イーリアス』と『オデュッセイア』はそれぞれ統一ある作品であるとみなす統一論者が主流であった。分析論と統一論の不毛な対立は20世紀初頭まで続いたが、その状況を打開するきっかけとなったのは、アメリカ人のミルマン・パリー（Milman Parry, 1902–1935）の研究であった。彼の研究の出発点は『イーリアス』と『オデュッセイア』の言語、特に固有名詞とそのepithet（形容語句）の用法の詳細な検討であった。パリーは、『イーリアス』と『オデュッセイア』においては人名等の固有名詞につく epithet は、個別の文脈に特にふさわしい意味のものが選ばれているのではなく、固有名詞と epithet の組み合わせが一詩行中の一定の韻律上の単位を満たすものとして体系的に作り上げられており、詩人は韻律上の要請から特定の epithet を用いるということを説得的に論証したのである。更に彼は、当時東ヨーロッパに現存していた口承叙事詩において、epithet の用法等に『イーリアス』や『オデュッセイア』と共通の特徴が見いだされることを報告した。パリーの一連の研究により、両叙事詩に現われる固有名詞と epithet の組み合わせの体系や似た場面描写の繰り返し等は、口承叙事詩技法に属することが明らかにされた。このことから、分析論者がより劣った詩人による付加の有力な証拠と考えた繰り返しは、実は口承叙事詩に特徴的な要素であり、原作者と違う詩人によって作られた部分であることを示す根拠とはなり得ないことが研究者の間で常識となったのである。そのため、現在では分析論の立場に立つ研究者はほとんどいなくなった。但し、『イーリアス』と『オデュッセイア』に口承叙事詩技法が見いだされることを認めても、それらが口承詩であることを認めない研究者はいる。そのような見解の根拠とされるのは、両叙事詩の文学的な洗練度が、現代に残る口承詩より遥かに高いことである。

『イーリアス』と『オデュッセイア』それぞれの作品の著者問題については統一論的な立場をとるものが現在では大多数である。その上で、両作品はそれぞれ別の作者によると考える研究者の方が、同一の作者によると考える研究者よりも多い。但し、両作品が同じ伝統に属する作品であり、さらには『オデュッセイア』は『イーリアス』を念頭において作られた作品であるとする点は、別の作者を想定する研究者も含めて、ほとんどの研究者が同意している。『オデュッセイア』には『イーリアス』との類似点や、『イーリアス』の特定の箇所を暗示するとみなしうる箇所があることがその主な理由である。次に引用する『オデュッセイア』の序歌も『イーリアス』との顕著な類似性を示している。

男を私に語れ、ムーサよ、多くの途を心得た（男を）、彼はとても多く
さまよった、トロイアの聖なる城を滅ぼした後で、
そして多くの人々の町を見て、心を知った、
そして彼は海で多くの苦難を自分の胸中に蒙った、
自分の命と仲間たちの帰国を得ようとしつつ、
しかし、仲間たちを救えなかった、努力したが、

なぜなら、彼らは彼ら自身の非道な行いによって滅びたのだ、
愚か者たち、彼らはヒュペリーオーン* 太陽神の牛を
食らったのだ。他方その神は彼らから帰国の日を取り上げた。
それらのうちどこからなりと、女神よ、ゼウスの娘よ、われわれにも語れ。

（『オデュッセイア』第１巻１－10行）

*「ヒュペリーオーン」は太陽神の添え名。

『オデュッセイア』は『イーリアス』と同じく女神への呼びかけ（invocation）から始まる。『イーリアス』の序歌第1行の「女神よ」は詩歌の女神ムーサを指すが、『オデュッセイア』の第1行では同じ女神が「ムーサ」という固有名詞によって名指され、第10行では再びムーサに対して今度は『イーリアス』の序歌第1行と同じく「女神よ」と呼びかけがなされる。詩の女神への呼びかけは英雄叙事詩の序歌の伝統的な形式となる。

『オデュッセイア』の序歌の第一語は「男を（ἄνδρα, andra)」となっている。これは叙事詩の主人公であるオデュッセウスを指す。オデュッセウスはトロイア戦争にギリシア軍の武将として参戦した。勝利の後ほとんどのギリシア軍の武将たちはすぐに故郷にたどり着いたが、オデュッセウスは海の神ポセイドーンの怒りに触れたため十年間も漂流した。トロイア戦争終結後何年もオデュッセウスの消息が故郷にもたらされなかったために、オデュッセウスの妻ペーネロペイアには多くの求婚者たちが結婚を迫り、それだけではなく、オデュッセウスの財産である家畜を奴隷たちに屠らせて、彼の館に集まり飲み食いしている。『オデュッセイア』では父親の消息をたずねて旅に出たオデュッセウスの一人息子であるテーレマコスが聞く父の話、またオデュッセウスが漂流中に様々な苦難に遭遇した物語、さらに乞食に変装して故郷イタケー島にたどり着いたオデュッセウスが求婚者たちにいかにして復讐を遂げたかが語られる。『オデュッセイア』全体としてはオデュッセウスとはどのような男であるのか、特にその知略と忍耐が強調されるのである。従って序歌の冒頭に置かれた「男を」という語が端的に叙事詩全体の主題を表しているということができる。この点で『オデュッセイア』序歌の第一語「男を」は『イーリアス』の序歌の第一語「怒りを」に対応している。

両叙事詩の序歌の対応点はさらにある。主題を示す「男を」を「多くの途を心得た」という形容詞が修飾し、さらに「男を」を先行詞とする関係代名詞（引用中では1行目の「彼は」）に導かれる節によって主題についての説明が続けられる。この構文は『イーリアス』の序歌と共通する。さらに、『オデュッセイア』の序歌にある「多くの苦難」は『イーリアス』の序歌にある「数知れぬ苦難」と対応する。これらの対応点が重なっていることから、『オデュッセイア』の序歌が『イーリアス』の序歌を念頭において作られたものであるとみなすことができるであろう。

『イーリアス』の序歌において、英雄らの多くの勇敢な魂がアイデース（冥府の神）のもとへ送られたという苦難の原因はアキレウスの怒りであるとされている。『オデュッセイア』の序

歌においては、オデュッセウスが仲間たちを救うことができなかったとされるが、その原因は「非道な行為（ἀτασθαλίαι アタスタリアイ）」とされる。オデュッセウスの仲間たちは、太陽神の聖なる牛を殺してはならないと警告を受けていたにもかかわらず、空腹のために屠殺して食べた。このアタスタリアイのために太陽神は怒り、一行が船出した後に、ゼウスに要請して嵐を引き起こす。嵐の中で彼らは全滅し、一人オデュッセウスのみが船の残骸につかまって生き残る。『オデュッセイア』では、苦難の原因が苦難を受けた者たち自身の責任に帰されている。

非道な行為（アタスタリアイ）はオデュッセウスの仲間たちについて用いられるのみではなく、『オデュッセイア』全体を通じてのキーワードである。序歌の後の神々の会議の場面でゼウスは次のように述べる。

> ああ、なんたることか、なんと人間どもは神々を非難することか。
> 禍はわれわれから生じると彼らは言う。だが、かれら自身が
> 自らの非道な行い（アタスタリアイ）によって定めを越えて苦難に遭うのだ。
>
> （『オデュッセイア』第1巻32－34行）

ゼウスは人間一般について、「自らの非道な行いによって」禍を蒙ると述べる。この表現は、オデュッセウスの仲間たちの破滅について述べられた序歌の表現と類似している。人間一般についてこのように述べた後、ゼウスはその実例としてアイギストスを挙げる。この人物は、ギリシア軍の総大将アガメムノーンがトロイアへ遠征中に、その妻クリュタイメーストレーと不倫関係を結んだ。そして神々から警告を受けていたにもかかわらず、それを無視して、帰国したアガメムノーンを暗殺し、その後にアガメムノーンの息子オレステースによって、父の復讐のため殺されたのである。さらにアタスタリアイという語は、求婚者たちの横暴な振る舞いについて頻繁に用いられる。求婚者たちは警告を受けたにもかかわらず、オデュッセウスの館の財産を浪費するというアタスタリアイをなし続けたために、オデュッセウスによって皆殺しにされた。このように『オデュッセイア』においては、警告を無視してアタスタリアイを犯したために禍を蒙るというパターンが、オデュッセウスの仲間たち、[　A　]、求婚者たちに共通し、さらに人間一般にも当てはまることが提示される。そしてオデュッセウスは仲間たちに対してはアタスタリアイについての警告者、求婚者たちに対してはアタスタリアイの［　B　］となる。苦難の原因としてのアタスタリアイが『オデュッセイア』の序歌に掲げられることは、『イーリアス』の序歌で苦難の原因として怒りが掲げられたことと対応する。その上で、苦難を蒙る者自身のアタスタリアイを苦難の原因とする『オデュッセイア』は、『イーリアス』よりも［　C　］的な色彩が強いということができる。

Ⅳ

紀元前一世紀のローマの詩人ウェルギリウスは、英雄アエネーアースを主人公とする叙事詩『アエネーイス』を作った。この作品の題材はギリシアの叙事詩『イーリアス』および『オデュッセイア』と関連づけられている。すなわち、ギリシア神話においてトロイアの武将アエネーアースは、トロイア陥落のとき西方へ落ちのびたとされていたが、ローマでは、彼がイタリアに到着し、ローマ民族の始祖となったとされ、ギリシアの伝説と自分たちの民族の起源が結びつけられた。ウェルギリウスは『アエネーイス』において、このローマの伝承を採用し、アエネーアースがトロイアから落ちのびて、イタリアにラーウィーニウムという都市を建設する過程を題材とした。

『アエネーイス』はラテン語の作品であるが、ウェルギリウスは作品構成や文体等様々な点で『イーリアス』、『オデュッセイア』を手本とした。それは序歌にも表れている。

戦いと男を私は歌う、彼は最初にトロイアの浜から
イタリアへ、運命によって逃亡してラーウィーニウムの岸へ
たどり着いた。彼は陸でも海でも天上の神々の力によって、
残酷なユーノーの執念深い怒りのためにひどく翻弄され、
また戦争でも多くを耐え忍んだ、都市を建設し
神々をラティウムへ運ぶまで。そこからラテン民族と
アルバの父祖たちと、高きローマの城壁が（由来する）。
ムーサよ、私に理由を語れ、如何に神威が傷つけられ、
何を神々の女王は嘆いて、敬虔において著しき男がこれほどの禍を経巡り、
これほどの労苦に出会うように駆り立てたのかを。
これほどの怒りが天上の者たちの心にはあるものか。

（『アエネーイス』第１巻１－11行）

このように『アエネーイス』序歌の冒頭には、『イーリアス』序歌の要素と『オデュッセイア』序歌の要素がともに顕著であるが、このことは『アエネーイス』全体の構成についても言うことができる。すなわち、『アエネーイス』の第1巻から第6巻まではトロイアからイタリアまでの漂流を内容とし、『オデュッセイア』と類似する。それに対して、第7巻から第12巻はイタリア到着後の戦闘を内容とし、『イーリアス』と類似する。

苦難の原因への言及も『アエネーイス』序歌と『イーリアス』と『オデュッセイア』の序歌との共通点である。この原因は、『イーリアス』ではアキレウスの怒り、『オデュッセイア』ではアタスタリアイであったが、『アエネーイス』では女神ユーノーの怒りとされる。この怒りは、

アエネーアースの子孫がユーノーのお気に入りの都市カルタゴの滅亡をもたらすことに起因する（第1巻12－20行）。従って、ユーノーがアエネーアースに対して怒りを抱いた理由は、アエネーアース自身にはない。このこととの関連で、序歌2行目の「運命（fatum）」という語は重要である。アエネーアースに課せられた運命とは、新しい都市ラーウィーニウムの建設であり、さらにその息子アスカーニウスがアルバという別の都市を建設し、その血筋からローマの建設者ロームルスが生まれ、ローマが世界の支配者として繁栄することであると最高神ユピテル（ギリシア神話のゼウスにあたる）は明言する（第1巻257–296行）。ユーノーの怒りによるアエネーアースの苦難とは、この運命に起因するのである。

ウェルギリウスが『アエネーイス』を制作していたとき、ホメーロスの叙事詩を手本とする作品が作られていたことは周囲に知られていたらしい。ウェルギリウスより年下のプローペルティウスは「何か『イーリアス』より偉大な作品が生まれつつある（『詩集』第2巻34歌66行）」という詩句を残している。ウェルギリウスはギリシアの叙事詩である『イーリアス』、『オデュッセイア』を模範としつつ、ローマの叙事詩としての独自性を打ち出している。『オデュッセイア』の漂流は［　D　］への旅であったが、『アエネーイス』の漂流は新しい住処、いわば第二の［　E　］を求める旅である。『イーリアス』の戦闘はトロイアという古い都市を破壊するための戦闘であったが、『アエネーイス』の戦闘はラーウィーニウムという新しい都市を建設するための戦闘なのである。

『アエネーイス』第6巻では、アエネーアースが冥界に下り、その父親アンキーセースの亡霊に出会う。その場面でアンキーセースがアエネーアースに対して、将来のローマのあり方について語る箇所がある。その箇所を英訳で引用しよう。

> Others, I do not doubt, shall beat out the bronze which breathes softer;
> Shall from marble draw forth the features of life;
> Shall plead their causes better; shall trace the paths of heaven
> With the rod and tell the rising of the stars:
> Remember you, O Roman, to rule the［　F　］with command, (1)
> These shall be your arts, to give continuity to peace,
> To spare the humbled, and to defeat the arrogant.
>
> （『アエネーイス』第6巻847–853行）

この引用の初めの“Others”はギリシア人を指す。彫刻や弁論術や天文学など芸術や学問において優れたギリシアは、ローマにとって先進文明国であるが、ローマは軍事力・政治力において勝り、ギリシアをも支配下に置き、地中海の覇者となる。『アエネーイス』という作品の枠を超えて将来のローマの姿をうつしだすこの科白には、ローマ人がギリシア人とは異なる使命、

すなわち地中海の覇者としての使命を持っているという自覚が表れている。

『オデュッセイア』の序歌では、主題であり主人公である男（オデュッセウス）には「多くの途を心得た」という形容詞が添えられていた。『アエネーイス』の序歌9行目では、主人公である男（アエネーアース）は「敬虔において著しき」と形容されている。「敬虔」の原語“pietas”は英語の“piety”の語源である。“pietas”は“piety”と同様に敬神を表すばかりではなく、親や子供や親族、さらには同胞に対して責任を持って義務を果たし、奉仕することをも表す。アエネーアースは、神から課せられた新しき都市建設という運命を引き受け、父親アンキーセースを敬い、息子アスカーニウスを慈しみ、同胞に対して責任感が強い人物として描かれている。従って、序歌でアエネーアースが「“pietas”において著しき」とされるのは主人公の本質的な特徴を示した形容である。さらに、『アエネーイス』全体を通じて、“pietas”の形容詞形“pius”がしばしば主人公アエネーアースを形容する語として用いられている。さらに“pietas”は『アエネーイス』におけるアエネーアースの特徴を示すだけでなく、特にローマ的な徳目を代表する語である。『イーリアス』の主人公アキレウスは武勇の英雄であり、『オデュッセイア』の主人公オデュッセウスは策略の英雄である。対照的なこれら二者は、ギリシア神話の二つの典型的な英雄像の反映である。それに対して、『アエネーイス』の主人公アエネーアースは、ローマ的な徳目である“pietas”を体現する英雄像としての性格付けがなされている。

『アエネーイス』は、ギリシアの叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』を手本としつつ、将来の地中海の覇者としてのローマを指し示す内容を盛り込み、主人公にはローマ的な徳目を体現させた。『アエネーイス』はローマの国民的叙事詩となったばかりではなく、さらに後のヨーロッパ文学に多大な影響を及ぼした。

V

17世紀の英国の詩人ジョン・ミルトンの作品『失楽園』（*Paradise Lost*）は、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』からの影響が顕著な作品である。しかし、この作品の題材は旧約聖書『創世記』に描かれたパラダイス（楽園）からの人間の追放である。ミルトンは、人間が住む世界の創造以前に神とその御子を中心とする軍勢と、セイタン（サタン）を中心とする軍勢の戦いがあったとする。セイタンを中心とする軍勢は敗北し、天上から追放され地獄へ落とされるが、セイタンは神の創造した人間を堕落させることによって神に対する復讐を遂げようとする。セイタンは新たに創造された世界にあるイーデン（エデン）の楽園に侵入する。そこには、最初の人間であるアダムとその妻イーヴ（イブ）が住んでいるが、セイタンは蛇の姿をとってイーヴに近づき、食べることを神によって禁じられていた知恵の木の実を食べるよう誘惑する。イーヴはその誘惑によりこの禁断の実を食べ、またアダムにも持って行って食べさせる。この罪を犯したアダムとイーヴは楽園から追放されるが、将来神の御子が人類を救うことが定められている。このように『失楽園』の内容は聖書に取材し、ミルトンの雄大な構想

によって展開されたものであるが、形式の上ではギリシア・ローマの英雄叙事詩との共通性が随所に見いだされる。

この作品の序歌にも、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』との類似点が顕著である。

Of (2) man's first disobedience, and the fruit (3)
Of that forbidden tree, whose mortal taste
Brought death into the world, and all our woe,
With loss of Eden, till one greater man (4)
Restore us, and regain the blissful seat,
Sing (5) heavenly Muse,

（『失楽園』第1巻1－6行）

“man's first disobedience”と“the fruit of that forbidden tree”が、呼びかけ（invocation）の形式による作品の主題の提示となっている。簡潔な主題の提示によって序歌が始められることは、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』と類似する。“man's first disobedience”とはアダムが犯す原罪のことである。“disobedience”とは不従順の意味で、この罪はアダムが神の命令に背き、禁断の実を食べたことを指す。その実が“the fruit of that forbidden tree”と述べられている。“man”という語が用いられていることは、『オデュッセイア』の序歌が「男を」で始まっていること、またそれに倣って『アエネーイス』が「戦いと男を」で始まっていることを思い起こさせる。

これらの簡潔な主題の提示に“whose”という関係代名詞が続き、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』の序歌と共通する構文となっている。“fruit of that forbidden tree”が関係代名詞の先行詞である。この実が死（death）とわれらすべての苦難（all our woe）をもたらしたとされることは、『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』の序歌において苦難とその原因が示されることと対応する。

アダムとイーヴが神に背いたために楽園から追放されることが、“loss of Eden”と表現される。しかし人類は永遠にこの状態に留まるのではない。序歌4–5行目に述べられているように一人のより偉大な男（one greater man）が人類のために至福に満ちた座（blissful seat）を回復してくれるからである。『失楽園』が直接の題材とするのはアダムとイーヴの楽園からの追放であるから、“one greater man”によって人類が救われることは、この作品の中で生じるのではなく、第12巻において予言の形で将来起こることとして示されている。『アエネーイス』の序歌においては、トロイアからラーウィーニウム、さらにアルバ、ローマという地名が並べられていた。アエネーアースがトロイアという住処を失うことは、アダムが楽園を失うことと対応する。さらにア

ルバ、ローマという『アエネーイス』の時間的枠を越えて、将来建設される都市の名前が言及されることは、『失楽園』の序歌において、遥かに将来の人類救済の行いが言及されていることと対応する。『失楽園』は『アエネーイス』と同じく、将来の出来事を指し示す作品であると言える。

“one greater man”という表現については、1行目にもmanという語が用いられていることに注目しなければならない。同じ語が用いられるために、1行目の“man”と4行目の“one greater man”との対照性が浮き彫りにされる。この対照性の強調は、神学的には予型論と呼ばれるものである。予型論とは、旧約聖書の内容が新約聖書の内容を予示するもの（予型）となっているとする見方である。その一例として、旧約聖書の『ヨナ書』の以下の箇所がある。

> さて、主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。「苦難の中でわたしが叫ぶと主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めるとわたしの声を聞いてくださった。・・・（中略）・・・」主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した。
>
> （『ヨナ書』第2章1–11節）

この箇所に記された出来事は新約聖書に記されている出来事を予示する予型であると解釈されて来た。その他に予型論が表れている箇所としては次に引用する『ローマの信徒への手紙』中の一節がある。

> 一人の罪によって、その一人を通して死が支配するようになったとすれば、なおさら、神の恵みと義の賜物とを豊かに受けている人は、一人のイエス・キリストを通して生き、支配するようになるのです。そこで、一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。
>
> （『ローマの信徒への手紙』第5章17–18節）

ここでは、最初に罪を犯したアダムをイエス・キリストと対比することにより、後者による人類の救済の意味が際立たせられている。劣った人物であるアダムは、その対極にある偉大なイエス・キリストを指し示す予型となっている。この予型論の見方をミルトンは『失楽園』の序歌に持ち込んだのである。また、先に述べたように、“man”という語は、『オデュッセイア』と『アエネーイス』冒頭の「男を」という語と対応する。従って、『オデュッセイア』と『アエネーイス』は一人の男のみを主題とするのに対して、『失楽園』は二人の男を、すなわち直接主題とするアダムだけではなく、アダムが予型として指し示すイエス・キリストをも主題とする

という『失楽園』の独自性が強調されることになる。

『失楽園』の序歌6行目以下の“Muse”への呼びかけ（invocation）は以下のように続く。

Sing heavenly Muse, that on the secret top
Of Oreb or of Sinai, didst （=did） inspire
That shepherd, who first taught the chosen seed,
In the beginning how the heavens and earth
Rose out of chaos: or if Sion hill
Delight thee （=you） more, and Siloa's brook that flowed
Fast (6) by the oracle of God; I thence
Invoke thy （=your） aid to my adventurous song,
That with no middle flight intends to soar
Above the Aonian mount (7), while it (8) pursues
Things unattempted yet in prose or rhyme.

（『失楽園』第1巻6−16行）

“Muse”への呼びかけはギリシア・ローマの叙事詩の序歌に共通する序歌の要素である。詩の女神ムーサはギリシア神話においてギリシアのボイオーティア地方にあるヘリコーン山と結びつけられる。ホメーロスと並び称されるギリシアの叙事詩人ヘーシオドスの『神統記』では、ヘリコーン山で羊飼いをしていたヘーシオドスにムーサたちがインスピレーションを与えた場面が描かれる。それに対して『失楽園』の序歌では、“Muse”が“Oreb”（ホレブ山）や“Sinai”（シナイ山）という旧約聖書の中で言及される山と結びつけられていることに注目すべきである。ホレブ山とは羊飼いをしていたモーセに、イスラエルの人々をエジプトから導き出すよう神が呼びかけた場所である。さらに、エジプトからイスラエルの民を導き出したモーセに、神はシナイ山の頂上で十戒をはじめ、イスラエルの人々が守るべき律法等を伝える。従って、ここでのギリシア・ローマの詩の女神“Muse”は、モーセに語りかけた聖書の神と重ねられているのである。

ミルトンは“Muse”に対して、自分の冒険的な歌（“my adventurous song”）への助力を乞う。この歌とは『失楽園』そのもののことである。ミルトンはこの歌が“Aonian mount”（ヘリコーン山）を越えて飛翔することを願う。そしてこの歌は散文でも韻文でも（“in prose or rhyme”）いまだかつて試みられなかったことごとを追求するものであると述べる。『失楽園』第9巻1–19行では、人間の罪や、それに対する神の怒りや断罪は、アキレウスの怒りやオデュッセウスに対するポセイドーンの怒りやアエネーアースに対するユーノーの怒りよりもより英雄的（“more heroic”）であると述べられている。

ギリシア・ローマの叙事詩は戦争を題材としたが、『失楽園』では善と悪の葛藤という倫理的な根本問題が中心的な題材となる。善の究極には神が、そして人類のために自己を犠牲にする神の御子がおり、悪の究極には神に反抗し、人間を堕落させるセイタンがいる。アダムは『失楽園』の主人公であるといえるが、彼は善と悪の葛藤の中心に据えられる。アダムという名は、旧約聖書の原語であるヘブライ語のアーダーム（“ādhām”）に由来する。アーダームとは「男、人」を意味する。アダムは人間すべての代表という側面を持つのである。彼はアキレウスやオデュッセウスやアエネーアースのように個人的な卓越性を発揮して活躍するとはいえない。アダムをめぐって生じる出来事は、人類全体の罪とそこからの救済と密接に関係づけられる。ミルトンはこの事実こそが、彼が模範としたギリシア・ローマの英雄叙事詩の題材より、より英雄的（“more heroic”）な題材であると自負しているとみなすことができる。

Ⅵ

英雄叙事詩の伝統とは、『イーリアス』においてすでに確立された形式や文体が、時代や文化や言語を越えて踏襲され、そこに新たな内容が盛り込まれることにより新たな生命が吹き込まれて来た過程である。『イーリアス』、『オデュッセイア』、『アエネーイス』、『失楽園』を、特に序歌に注目して検討することにより、個々の作品における創意工夫とともに、英雄叙事詩の伝統を通じて引き継がれる関心にも気づかされる。簡潔に叙事詩全体の主題を冒頭に掲げるという形式は、以上のすべての作品に共通する。冒頭における主題提示の形式は、この伝統に属する叙事詩が、いずれも長大でありながら、同時に有機的な統一性を保った作品となっていることと密接に結びついていると思われる。伝承された素材を叙事詩に仕上げるにあたり、明確な主題を中心として意味連関のある出来事の継起がこれらの叙事詩の時間的な枠として設定されている。その上で、この時間的な枠と、過去および将来の出来事との関連性の創出に個々の作品の独自性が表れている。

また人間の苦難とその理由への言及がこれらの作品の序歌に共通する要素となっていることにも注目すべきであろう。このことは、一般に苦難の理由は［　G　］という倫理的関心の普遍性のあらわれとみなすことができるかもしれない。さらに、より具体的にはいずれの作品にも人間の世界の外側に神界があり、人間の苦難を神の目から見て位置づけるという構造があることが序歌にも反映していると言うことができるであろう。

参考文献

R. G. Austin, *Virgil, Aeneid I,* Oxford U. P., 1971.

C. M. Bowra, *From Virgil to Milton*, Macmillan, 1967.

A. Fowler, *Milton, Paradise Lost*, Longman, 1968.

A. Heubeck, A. Hoekstra, S. West, *A Commentary on the Odyssey*, vol.1, Oxford U. P., 1988.

G. S. Kirk, *The Iliad, A Commentary*, vol. 1, Cambridge U. P., 1985.

R. G. Williams, *The Aeneid*, vol. 1, Macmillan, 1972.

E. R. クルティウス,『ヨーロッパ文学とラテン中世』, みすず書房, 1971.

『聖書新共同訳』、日本聖書協会、1987年。

次の問題（1－40）には，それぞれａ，ｂ，ｃ，ｄの答えが与えてあります。各問題につき，ａ，ｂ，ｃ，ｄのなかから，最も適当と思う答えを一つだけ選び，解答用カードの相当欄にあたるａ，ｂ，ｃ，ｄのいずれかのわくのなかを黒くぬって，あなたの答えを示しなさい。

例 (41)　　⊂a⊃　⊂b⊃　■　⊂d⊃

1. 資料1頁に引用された『平家物語』冒頭の4行についての説明として以下のうち最も適切なのはどれか。

a. 1行目と3行目、2行目と4行目はそれぞれ対句となっている。
b. 3行目と4行目の後半は比喩表現となっている。
c. 頭韻、脚韻がところどころに用いられている。
d. 七五調が厳格に保たれているが、わずかに例外がある。

2. 資料1頁下線部(1)の「理」と置き換えられる最も適切な熟語は、次のうちどれか。

a. 道理
b. 理由
c. 理論
d. 摂理

3 『平家物語』冒頭の「理」と『イーリアス』序歌の「ゼウスの計画」との比較に関して以下のうち最も適切なのはどれか。

a.『平家物語』の「理」は仏典に基づくため教義的であるのに対して、『イーリアス』の「ゼウスの計画」は神話的である点で対照的である。
b.『平家物語』の「理」は静的世界観に基づくのに対して、『イーリアス』の「ゼウスの計画」は動的世界観に基づく点で対照的である。
c.『平家物語』の「理」は歴史上多くの実例があり実証的であるのに対して、『イーリアス』の「ゼウスの計画」は仮構的である点で対照的である。
d.『平家物語』の「理」は普遍的であるのに対して、『イーリアス』の「ゼウスの計画」は特定の神格の動機に基づいている点で対照的である。

4. 『イーリアス』冒頭の「ゼウスの計画」とは何であると考えられるか。以下のうち最も適切なのはどれか。

a. ムーサがアキレウスの怒りを歌うこと。
b. アガメムノーンとアキレウスを仲違いさせること。
c. 人間同士の争いに関与すること。
d. アカイア人を大いに苦しめ、多くの英雄を死なせること。

5. 「叙事詩」というジャンルに含まれないのは、以下のうちどれか。

a.『ローランの歌』(*La Chanson de Roland*)
b.『カンツォニエーレ』(*Il Canzoniere*)
c.『ベーオウルフ』(*Beowulf*)
d.『ニーベルンゲンの歌』(*Das Nibelungenlied*)

6. 資料3頁の『崇高について』からの引用の説明として最もふさわしいのは以下のどれか。

a.『オデュッセイア』を夕日に喩えたことから、『イーリアス』は朝日に喩えられているとみなすことができる。
b. 著者は『イーリアス』と『オデュッセイア』の著作時期が大きく異なるとする点で「分離論者」に属する。
c. 偉大さの点で、夕日に喩えられる『オデュッセイア』は『イーリアス』に劣ると考えられている。
d.『イーリアス』と比較すると『オデュッセイア』はより静かな内容の作品であるとみなされている。

7. 日本古典作品において epithet にほぼ相当するのは以下のどれか。

a. 掛け詞
b. 枕詞
c. 係り結び
d. 体言止め

8. 口承叙事詩におけるepithetの用法について、本資料の論旨に基づいて最も適切なのは以下のうちどれか。

a. アキレウスが走っている場面でも、韻律上あてはまらなければ「足の速いアキレウス」という組み合わせは用いられない。
b.「足の速いアキレウス」になるか「神のごときアキレウス」になるかは、軽快な韻律を用いるか荘重な韻律を用いるかによって決まる。
c. アキレウスが足の速い人物であるか否かに関わらず、韻律上の要請に従って「足の速いアキレウス」という表現が用いられる。
d. より印象深い効果的な韻律を作り出すために、詩人は「足の速いアキレウス」と「神のごときアキレウス」を使い分ける。

9. 『イーリアス』と『オデュッセイア』の作者問題について、本資料の論旨と合致するのは以下のうちどれか。

a. 近代のホメーロス研究において分析論者と対立した統一論者は、同一人が『イーリアス』と『オデュッセイア』両方を作ったと考えた。
b. 両叙事詩に口承叙事詩技法が見いだされることを認める者は皆、それらが文字を介さずに作られたと考えた。
c. パリーは、古代の叙事詩についての自説を補強するために、現代の口承叙事詩の例を傍証として用いた。
d. 古代ギリシアにおいて分離論の立場をとるものは少数派であったように、現代の研究者の間でも少数派である。

10. 資料6頁空欄Aにあてはまるのは以下のどれか。

a. アガメムノーン
b. アイギストス
c. オレステース
d. クリュタイメーストレー

11. 資料6頁空欄Bに入れる語句として最もふさわしいのは以下のどれか。

a. 告発者
b. 批判者
c. 扇動者
d. 懲罰者

12. 資料6頁空欄Cに最もふさわしい語句は以下のどれか。

a. 因果応報
b. 自己責任
c. 信賞必罰
d. 艱難辛苦

13. 『イーリアス』と『オデュッセイア』に共通する特徴でないのは、次のうちどれか。

a. すべての運命を決するのは神々であること。
b. 人間の苦難を歌っていること。
c. ムーサへの呼びかけで始まること。
d.「怒り」が物語の展開を左右すること。

14. 『アエネーイス』の題材について、最も適切なのは以下のうちどれか。

a. ギリシアの伝説では、アエネーアースが建設した都市の名は（第二の）トロイアであったが、ローマではラーウィーニウムとされた。
b. ロームルスをアエネーアースの血統に組み込むことにより、ローマ民族とトロイア民族との血縁関係が仮構された。
c. トロイア伝説のアエネーアースとローマ建国伝説を結びつけた点に、ウェルギリウスの『アエネーイス』の独自性がある。
d. アエネーアースがイタリアに都市を建設するというギリシアの伝説と、ロームルスによるローマ建設の伝説が結びつけられた。

15. ゼウス（Zeus）— ユピテル（Iuppiter）の対応関係にあてはまらないのはどれか。

a. ヘーラー（Hera）— ユーノー（Iuno）
b. ディオニューソス（Dionysos）— マルス（Mars）
c. ヘルメース（Hermes）— メルクリウス（Mercurius）
d. アプロディーテー（Aphrodite）— ウェヌス（Venus）

16. 資料8頁空欄Dと空欄Eに入る語句の組み合わせとして最もふさわしいのは以下のどれか。

	D	E
a.	故郷	自己
b.	自己	自己
c.	故郷	故郷
d.	故郷	異郷

17. 資料8頁下線部（1）のラテン語原文は regere imperio populos である。空欄Fに入れるのに最もふさわしいのは以下のどれか。

a. nations
b. poplars
c. continents
d. emperors

18. 以下の文章のうち、本資料に即して正しい記述はどれか。

a. ウェルギリウスは『アエネーイス』において予型論を用いている。
b. ウェルギリウスは『アエネーイス』において口承詩の技法を用いている。
c. ウェルギリウスは『アエネーイス』においてアタスタリアイを展開している。
d. ウェルギリウスは『アエネーイス』においてトロイア伝説を用いている。

19. 『アエネーイス』と『オデュッセイア』の比較について、以下のうち最も適切なのはどれか。

a. ともに主人公がトロイアで敗北し逃亡したことは共通点であるが、向かう先が故郷であるか、見知らぬ新たな土地であるかについては相違している。
b. 序歌で女神へのinvocationが用いられている点は共通であるが、ムーサが神々の女王とされている点に、『アエネーイス』の独創性が表れている。
c.「男」を主題として序歌で提示する点は共通であるが、その「男」が武勇の英雄であるか知略の英雄であるかについては相違している。
d. 神の怒りのために主人公が苦難を受ける点は共通であるが、その怒りの原因がすでに行われたことであるか、いまだ行われていないことであるかについては相違している。

20. pietas — pius の関係と一致するのは次のどれか。

a. gaiety — gay
b. piety — piteous
c. running — run
d. gravity — gray

21. 『アエネーイス』において予示されている将来の出来事に含まれるのは以下のどれか。

a. ラーウィーニウムの建設
b. 女神ユーノーの怒り
c. アルバの建設
d. トロイアの陥落

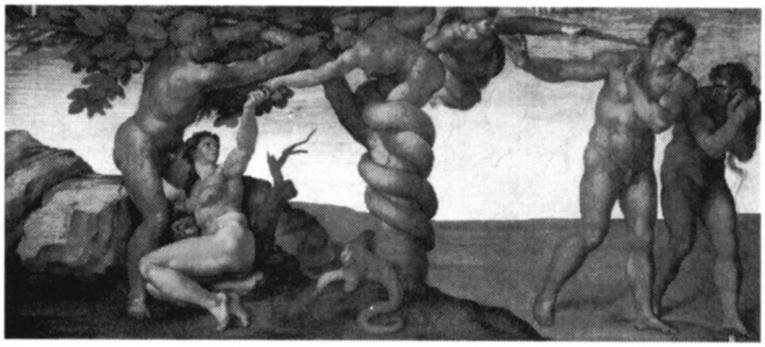
22. 『失楽園』の原題 *Paradise Lost* について、正しい考え方は以下のうちどれか。

a. 失楽園という名前の庭園のことである。
b. イーデンの園の別名である。
c. 失われた楽園という意味である。
d. 楽しみを失った園という意味である。

23. 本資料で言及されている「禁断の実」について正しい叙述は以下のどれか。

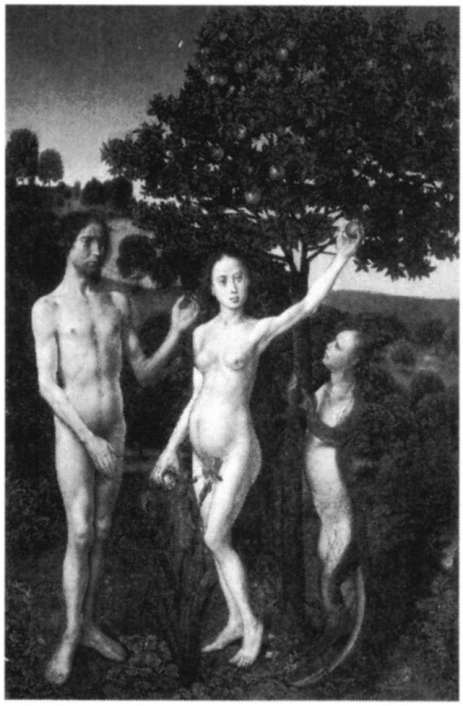
a.『旧約聖書』によればこの果物はモモである。
b.『旧約聖書』によればこの果物はザクロである。
c.『旧約聖書』によればこの果物はリンゴである。
d. 以上のいずれも誤りである。

24. 次の4枚の作品は、いずれも15−16世紀に描かれた「楽園」を主題としたものであるが、そのうち3枚はイタリア、1枚はフランドルの作品である。フランドルの画家の手になるのはどれか。人体の描き方に注目して答えよ。

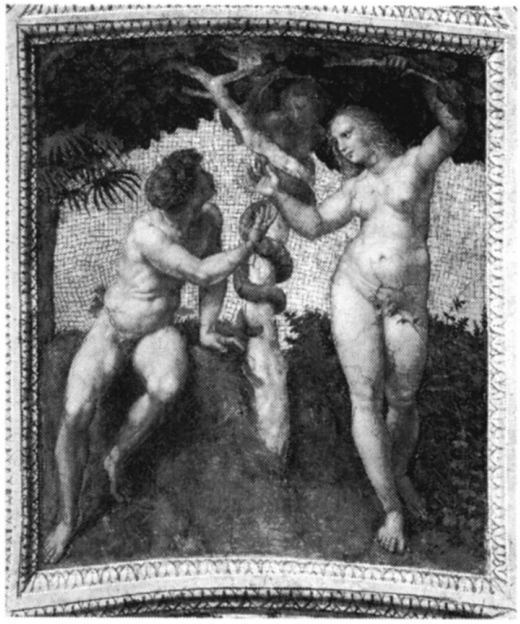


a.

b.



c.



d.

25. 資料10頁下線部（2）のOfについて、正しい見解は以下のうちどれか。

a.「である」という同格の意味合いをもっている。
b.「の」という所有格の意味合いをもっている。
c.「から」という意味合いをもっている。
d.「について」という意味合いをもっている。

26. 資料10頁下線部（3）のfruitには二つの意味が重ねられていると解釈することができる。その二つの意味としてもっともふさわしいのは以下のどれか。

a.「果実」と「子孫」
b.「果実」と「利益」
c.「果実」と「結果」
d.「果実」と「甘さ」

27. 資料10頁下線部（4）のone greater manとは以下のどれか。

a. ミルトンのことである。
b. イエス・キリストのことである。
c. アエネーアースのことである。
d. アダムのことである。

28. 資料10頁下線部（5）のSingについて正しくないのは以下のどれか。

a. Museに対する呼びかけである。
b. 主語はmanである。
c. 冒頭のOfにつながっている。
d. 命令文である。

29. 資料11頁の『ヨナ書』からの引用箇所について、予型論的解釈によると予示されているのは以下のどれか。

a. 大洪水とノアの方舟
b. パウロの船旅中の嵐からの脱出
c. イエス・キリストの死と復活
d. ペテロによる投網漁での大漁

30. 資料12頁の下線部（6）のFastの意味として最もふさわしいのは以下のどれか。

a. 素早く
b. しっかりと
c. 近くに
d. 最初に

31. 資料12頁下線部（7）のAbove the Aonian Mountについて、以下のうち最も適切なのはどれか。

a.「イスラエルからギリシアの山を越えてヨーロッパ世界へ向けて」の意味合いである。
b.「ヘーシオドスがヘリコーン山で受けたより強いインスピレーションを受けて」の意味合いである。
c.「ヘリコーン山より高いホレブ山やシナイ山でムーサに導かれて」の意味合いである。
d.「ムーサに導かれたギリシア・ローマの叙事詩よりも優れた作品として」の意味合いである。

32. 資料12頁の下線部（8）の it は何を指すか。

a. my adventurous song
b. thy aid
c. no middle flight
d. the Aonian mount

33. 資料12頁にヘーシオドスの作品が言及されているが、同じ詩人のもうひとつの代表作は次のうちどれか。

a.『仕事と日』(*Erga kai Hemerai*)
b.『饗宴』(*Symposion*)
c.『変身物語』(*Metamorphoses*)
d.『ゲルマーニア』(*Germania*)

34. 本資料によれば、パラダイス（楽園）の説明として最も適切なものは以下のうちどれか。

a. パラダイスは、天国のことである。
b. パラダイスは、英雄たちの魂が死後送られる場である。
c. パラダイスは、キリストが十字架による処刑の後挙げられた場である。
d. パラダイスは、イーデンと同一視されている。

35. 『失楽園』で描かれている罪が『オデュッセイア』で描かれているそれと決定的に異なる点とは何か。

a. 罪を犯した当事者が罰を受けたこと。
b. 神を怒らせたこと。
c. 苦難が子孫にまで及んだこと。
d. 罪を犯した当事者に最終的に救いがあること。

36. 『失楽園』において、『オデュッセイア』におけるアタスタリアイに相当するものは以下のどれか。

a. anger
b. disobedience
c. sin
d. loss

37. 『アエネーイス』と『失楽園』の共通点ではないものは以下のどれか。

a. これらの作者は、ともにギリシアの二大叙事詩を踏まえて作品を制作している。
b. これらの作者は、ギリシアの二大叙事詩と同じように、口承詩技法を取り入れている。
c. これらの作品は、過去の顛末を語るだけでなく、未来の展望にもふれている。
d. これらの作品は、ともにインスピレーションの源泉としての女神に歌いかけている。

38. 本資料に示された解釈に基づいて、『失楽園』における「英雄的（heroic）」という概念について述べたものとして、以下のうちで最も適切なのはどれか。

a. ミルトンは、手本とした叙事詩の主題よりも、キリスト教的に扱われた人間の根本的な問題を一層「英雄的」とみなすことにより、「英雄的」という概念に変更を加えた。
b. アキレウス、オデュッセウス、アエネーアースと匹敵するほどではないにしろ、アダムは人間的な卓越性によって、英雄的題材を担いうる人物として描かれていた。
c. ミルトンは、ギリシア・ローマの叙事詩において顕著な怒りではなく、それとは反対の愛と許しの方がより英雄的（heroic）であると考えた。
d. ミルトンはギリシア・ローマの叙事詩の主人公たちが自らの個人的な功績を求めるのに対して、人類全体を代表する故にアダムはより英雄的であると考えた。

39.　資料13頁空欄Gに最もふさわしいのは以下のどれか。

a. われわれ自身の責任において生じるのか、それともわれわれには手の届かない外的な力によって生じるのか
b. あらかじめ何らかの方法によって予測可能であるのか、あるいはいかなる仕方によっても回避不可能であるのか
c. 正義と善の体現者であるべき神から生じるのか、あるいは神とは独立した、神に敵対する存在から生じるのか
d. 忍耐を発揮する機会として積極的にとらえるべきか、あるいは諦念を与えられる機会として消極的にとらえるべきか

40.　本資料のタイトルとして最もふさわしいのは以下のどれか。

a. 叙事詩における過去と未来 ―序歌を手がかりとして―
b. 叙事詩の運命観の比較 ―序歌を手がかりとして―
c. 英雄叙事詩の系譜 ―序歌を手がかりとして―
d. 叙事詩技法の発展 ―序歌を手がかりとして―